ISO 15189 認定取得に向けた生理検査室の取り組み

◎佐藤 美和[1)]、鶉橋 亜希乃[1)]、小野 あや子[1)]、永野 亜津沙[1)]、星 友香[1)]、千葉 圭子[1)]、氏家 恭子[1)]、泉澤 淳子[1)]
地方独立行政法人宮城県立病院機構 宮城県立がんセンター[1)]

【背景】宮城県立がんセンターは東北地方唯一のがんセンターである。2018 年「がんゲノム医療連携病院」に指定され、当検査部は 2019 年度中の ISO 15189 認定取得が必須となった。現在 24 名の臨床検査技師が在籍し、生化学・免疫検査、血液・凝固検査、輸血検査（血液管理業務含む）、細菌検査、一般検査、遺伝子検査、病理検査、生理検査業務を行っている。生理検査部門は 2018 年度から 6 名で、主に心電図、肺機能、超音波検査を担当し、一般検査も兼務している。【課題】検査室環境の改善、日常点検の不足、マニュアル内容の見直し、緊急時や患者の安全対策【方策】電子カルテ画面を可能な限り部外者の目に触れないよう配置変更した。カーテンで仕切られた各ブースに温湿度計を配備し、朝と日中帯で管理した。ベッドのシーツ、枕カバーをディスポタイプへ変更した。脱衣カゴのキャスターを撤去し、肺機能検査で使用する患者用の背もたれ付きイスは体重でストッパーがかかるものを採用した。検査装置は始業・終業時に日常点検を行い、定期的に機器間差および技師間差を確認することとした。既存のマニュアルを見直し、標準作業手順書を作成した。検査室前廊下待合を監視できる定点カメラ、技師一人で検査を行う時間帯の安全対策として携帯用ブザーを配備した。院内医療安全管理室の協力で、定期的に患者に対する急変時シミュレーションを行うこととした。判断に悩むような所見は、複数の技師でディスカッションし、記録を残して全員で情報共有することを徹底した。【まとめ】現在も ISO　15189 認定取得を目指し、進行形で改善に取り組んでいる。他職種との連携をはかりながら、環境面の整備は可能な限り行うことができた。しかし、技術の標準化は難しく、内部精度管理において何を基準に、どう評価するかもまだ手探り状態である。そして中堅以上の技師に対する教育も今後の課題にあげられる。認定はゴールではなく、よりよい検査室にしていくための手段である。今後もワークライフバランスを考えながら、質の高い検査サービスを提供できるよう努力していきたい。連絡先：022-384-3151(内線 322)